
深い海の底。光という幻想を見た後で

てんとうむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深い海の底。光という幻想を見た後で

【Nコード】

N25850

【作者名】

てんとうむし

【あらすじ】

たった一人のなんでもなさそうな、というより見た目的には真面目そうで地味な私由利。

境界性人格障害、アダルトチルドレンと生きる、私の物語。

今現在まで来るのにはとても時間がかかりました。

それは、『難しく考えすぎて』

ただそれだけかもしれません。

近道はいくらでもあったのかもしれない。

ノンフィクションです。

はじめまして

境界性人格障害になつた私の物語です。

理解し図らい、周りにはわかり図らいこの病気。

この病気になつた方、周りにそういう人がいる方。そんな方々には読みやすい小説かもしれません。

この小説で多くの人が目の前にある幸せを気づけたら幸いです。

ノンフィクション。

闇に溺れていく、光を目指して必死に生きる

不器用で、子供みたいな大人のふりして、自分がわからない。

今思えばとても滑稽で、なんでもない事だったのかな…
とも思っています。笑

生まれてから今までのことを綴ろうと思います。

現在、私は病気と闘いつつも幸せに暮らしています。

母という大きな光（前書き）

幼稚園の頃

母という大きな光

「うえ…う…げほっ」

母と父が買ってくれてたピンクのモコモコした素材のウェアの上に
だらだらと私の嘔吐物が流れていく。

ダンダンダン。

大きく聞こえる足音段々近づいてくる。

恐怖で体が凍りついてくる

目の前で母の足が止まった。とてもじゃないけど、顔を見ることが
できない。

座ったまま吐いてしまっただけ俯いている私の顔を上げて母はビンタす
る。

バチン。

右頬に母の手の痕が残る。

そして私の前を去った。お互い無言。

4歳の私。怖くて声が出ない。

キレイにしなきゃ。キレイにしなきゃ。
またお母さんが怒る。

いっぱいティッシュを使いながら、必死で汚してしまったウェアを拭く。

自分の嘔吐物の臭いで何度も吐き気に襲われて
叩かれた顔が痛くて、子供ながらに声をがまんして泣きながら。

「早くしな！もうバスが来るよ」

イライラしたような声をあげて母と2歳年下の妹が母に抱かれて玄関にいる。

早くしなきゃ。早くしなきゃ。
幼稚園のお迎えのバスが来る。

急いでお弁当が入った鞆を肩に掛けて、母と妹のところへ向かった。

急ぎすぎてパニックになっているせいか、靴がうまく履けない。
心臓がバクバク早くなっていく。

思った通り、頭に母の拳がとんできた。

ガッン。

その音が響いて、頭の中は真っ白になる。

「早くしなよ。ホントになんでももたもたして」
「…うん。」

真つ白の頭の中で、ようやく靴を履くことができた。

16階建ての14階に住む、4人家族。

エレベーターの中では雰囲気伝わってくる。

恐ろしい程の母の怒り。

無言の圧力。

吐いてしまった。いけない事をしてしまった。

なんで飲み込めないんだろう。

靴も上手く履けない。

心臓が千切れそうな心の痛み。

母の顔なんてみれなくて俯いたまま。

チーン。

頭に響くような音で一階に着いた。

バスがもう来ている。

「ごめんなさい。少し遅れてしまつて。ほらいきな」

小走りで幼稚園の先生に笑顔で話す母。

急いでバスに乗る。座つたとたん鼻水がだらだら。

私は体が弱く、よく風邪をひいていた。

オレンジ味、イチゴ味。

様々な味でごまかしている、小さな袋に入つたいっぱいのカラフルな粉の風邪薬。

とてもじゃないけど飲み込めない。
大人でも吐いてしまうような味の、一回では飲み込めないような粉の量。

飲むたびに喉に引っかかり、口いっぱいにむりやり粉の味が広がる。

私に一生無理だと覚えさせる感覚。

母は私が吐く度手をあげた。

「うあーん。痛いよー。げほっ。うおえっっ」

「うるさい！黙って薬飲み込みな！また吐いた」

バチン。

「あー…」

バチン。

涙で顔を真っ赤にしながら泣きながら吐く。

吐く度、叩かれる。

喉に幾度となくつつかかって飲み込めない。

飲めない私が悪い。

頭の中は自分を責めて責めて、良い子でない自分を嫌った。

何時の日か、母は無言で叩くようになり

私も声をあげることがなくなっていった。

幼稚園と先生と母のお弁当（前書き）

『ここを卒園した子の小学生は周りの子と違う。才能が伸びる』
そんな噂がある地元では結構有名な幼稚園に通っていました。

そこでの先生との関わり方。自分に出来た友達

幼稚園と先生と母のお弁当

そんな中、幼稚園には嫌々通っていた。
母と離れるのが嫌だった。

ただそれだけ。

幼稚園の中は、時間にも厳しく、行動するのも先生の言う通りにしなければならぬ。

先生の話を聞いてその話を後でそのまま先生に伝えなければならぬという事もある。

これができなければ、帰れない。

だからいつも緊張状態でいる私がいた。

良い子でみられたい。好かれていたい。

その一心のみ。

一生懸命、さつき先生が言っていた事を思い出す。

だけど何分経つとも思い出せなくて、帰れなくて
私はまたよく泣いていた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

一生懸命泣いて謝って。

あんまり覚えていないけど、その後はいつも帰りに乗るバスに乗っていた。

乗せなきゃ帰れないし、色々苦情も来るからだと思うけど。

幼稚園の中の自由時間では、男の子と一緒に
なってよくブロックでロボットや、家を作って遊んだ。

おままごと友達が誘ってくれたらやるけど、あんまり好きではなくて人形遊びも、周りの子と感覚が違うって幼いながらわかってて

単純な物を作って壊す、という簡単な遊び。

その男の子達の何も考えていなさそうなグループに混じって遊んでた。

基本、誰とでも合わせて、その子の期待通りに動いて

一人になることはなかった。でも、女の子のグループには入れたことが無かった。

なぜか馴染めない。でも、嫌われてもいない。

そんな私にはクラスでよく嫌われている、一人でいる、そんな子がよってきては

よく一緒に居て、その子がどこかのグループに行ったらさよならで

そんな繰り返しだった。

男の子と一緒にいたほうが楽だった。

でもそんなことも長い時間できない。長い時間遊んでいたら、あの子好きなの？

とか、へんに女の子から一目置かれる。

それが怖くて、誰とでも良い顔して、自分の気持ちよりも相手も気持ちを読み取って

合わせて。先生と同じ。良い子で見られたい。

いつだかの幼稚園で写した写真は、がちがちに固まって

気疲れしそうなくらい真面目な顔で、足は閉じ、手はグーに強く握り締めて膝に置いて

周りの子は、どこか向いていたり、ピースしていたり、男の子だったらだらけて座っていたり

どこか場違いな、無駄に頑張りすぎている自分の姿。

お昼だけが私を支えていた。
母の手作りのお弁当。

お昼だけは気が緩むことが出来た。

みんな真剣になって食べてる。私の弁当はいつもカラフルなお弁当。外を気にする母だから、完璧に仕立て上げたかったんじゃないかと今なら思う。

美味しい、とか、おいしくないとか。そんなのは私にはなかった。

ただ先生の言われたとおりに全部食べる。

家においても食事ができたらただ物を口に運ぶ。そして飲み込む。ただそれだけ。

この行動は23歳になっても続くことになる。

味がわからない。食べることが楽しめない。

でも、「おいしい。お母さんのご飯は世界一おいしい」

って、言ってた。

そう言うとお母は笑うから。

機嫌が悪くて無視される日もあるけど、見捨てられたくなくて、嫌われたくなくて

毎日毎日

「おいしい。おいしい。」
って言ってた。

味なんてわからない。正直、そんなのどうでもいい。

少しでも母の思う良い子でいたい。

『お母さん。お母さん。手を握って。たくさんたくさん笑って。良い子でいるから。おこらないで』

小さな小さな、誰にも言えない私のSOS。
誰も気づくことなく日々は過ぎてゆく。

一人きりの永遠の夜（前書き）

真っ暗だった

一人きりの永遠の夜

夜寝るときは父、母、私、妹はベビーベットの順で寝る。

私は知っていた。夜遅くに母が家を出て行ってしまうこと。

このまま消えてしまうんじゃないかって、どこ行くんだろうって、不安で不安で眠れなかった。

いつも夜遅くまで起きている。

そして母と一緒に布団に入る。

毎日、毎日、母のパジャマの袖を握って。

母は気づかなかったと思うけど。

母が夜中起きるとき、大体私も起きる。握ってる手から袖が離れる。そつと気づかれないように起きて母の様子を見ていた。

なんだか出かける準備をしている。

「…何やってるの？」

ビクビクしながら聞く。

熟睡している父。寝息をたててる妹。

「あら起きてたの。大丈夫だよ。どこにも行かないよ。ジュース買ってくるだけ。」

「本当に？一緒に行く。」

「ダメだよ。こんな夜に。ゆっくり寝てなさい。お父さんも起こしたらダメだよ。」

疲れて寝てるんだからね」

優しい声で話しかけてくる。

「うん…。早く帰ってきてね」

「早く帰ってくるから。もう布団に入ってな」

布団に入った後、しばらくして玄関のドアが閉まる音がした。

たった一人だけになったような気がする。

また涙がでてる。胸が締め付けられる。

『お父さんにバレてはいけない。起こしてはいけない。絶対にお母さんが帰ってくるまで待つてよう』

毎日、毎日、そう思って頑張って起きていたけど、気がついたら朝になっ

いつも通り、母が家にいた。

「夜どこ行っただの？今日の夜もどこか行くの？」

「その事は誰にも言うんじゃないよ。お母さんはジュース買いに行っただけだよ」

怒りが伝わってくる。

朝はバタバタ忙しい。妹もお腹が空いているのか泣いている。

怖くてこれ以上何も言うことができなかった。

この母との約束は一生守り続けることになる。

幼稚園へ行く支度をして、風邪薬を飲んで、吐いて、叩かれて、いつもと変わらない日常。

そして、変わらず母は夜いなくなることが多くそれが続いた。

誕生日（前書き）

希望に満ちて生まれた私は真っ暗な闇に吸い込まれた

誕生日

長い長い時間が過ぎて幼稚園から家へ帰る。

行きも帰りも幼稚園から専用のバスがでていて、それに乗っていた。

私はいつも窓側に座って家の前で待つ母と母に抱えられている妹を見ていた。

母が先生と話す時、機嫌がよくなる。

というより笑顔でいなきゃいけないからかもしれない。

少しでも母から何か関わりたくて、いつもわざと制服をだらけて着てバスから降りてみたり、

バスを降りる直前に帽子をだらしなくかぶってみたり

そんなことを毎日続けていた。

エレベーターの中

「ほら、ちゃんと制服きなさい」

「ちゃんと帽子をかぶりなさい」

そんな風に言っただらしなくなっている部分を直してくれる。それが嬉しかった。

家の中ではないから叩かれることもない。

家の中に入ると妹と遊んでいた。やっぱりブロック作りだけど。

母は私が何か物を作るのが好きなのを知って、大きいブロックや小さいブロック、積み木を買ってくれた。

嬉しくて毎日毎日、飽きずに妹を巻き込んで色んなものを作っていた。

父は大工をやっていて棟梁をやっていた。

私は父の血を受け継いでいるのかもしれない。

父はしょっちゅう出張に行っていて、帰りも遅くて父と一緒に居た記憶はない。

私の5歳の誕生日、特別に記憶に残っている。

「やっぱり帰って来ないね。誕生日やっちゃうか。」

母と父の帰りを待っていて、元氣なく母は言った。
隣には無邪気にえへえへ座って笑っている妹。

テーブルには1ホールの苺のケーキと4人分ぐらいのいつもより華やかな料理が並んでいる。

何かメッセージの書いてあるチョコの板の周りには5本のローソク。
母が火を灯してくれた。

「ほら消しなよ。」
笑顔で言う。

「うん。」

無邪気に言って私は火を消した。

「ほらこれ、プレゼントだよ。」

そう言って母が指差した方には、大きな包みの箱があった。

「何？何？」

ワクワクして包装紙をビリビリに破ったのを覚えている。

その箱の中には、いつだか母と一緒にデパートへ行って欲しいと言った、シルバニアファミリーみたいな大きなおもちゃの家一つと、そこに住む小さなうさぎの女の子二体。

「わあ！すごい家だあ！お母さんすごいよ！家だよ！」

興奮がおさまらなかった。母は何も言わずニコニコしていた。すぐに妹が触ろうとする。

「ダメだよ！これは由利のだよ！触ったらダメだよ！」

妹は不満そうな顔で見つめていた。でも次の日には一緒にそれで遊んでいた。人形が2体あるんだから。

母はそれを望んで2体うさぎの人形を買ったのかもしれない。妹は私と違って人形が大好きだ。それは20歳になっても変わらないことになる。

私は家が欲しかった。物を作る時もなぜか家ばかり作ることが多い。車一台と、犬がとか作って、ブロックの家もなぜだか大体4人、人

が家にいる。

私の帰れる家、いつでも迎え入れてくれるどんな私でも受けて入れてくれる居場所。

今の私は母の顔色をみて、幼稚園ではいい子で、息が苦しく感じる。足のつかないプールを一生懸命ずっと、ずっと、泳いでいるような感覚。

父が私の誕生日会が終わって落ち着いた頃、ようやく帰ってきた。

「遅いんだよ！もう子供も寝る時間でしょ！？なんでこういう時ぐらい帰ってこないんだよ！」

「しょうがいだろ！仕事なんだよ。忙しいんだ！」

二人とも怒鳴りあっている。父が帰って来たらいつも怒鳴りあい。喧嘩の嵐。

その姿をじつと妹と隅っこの方で見ていた。妹はいつも泣くけど。

でも、この日はいつもと違っていた。この私の誕生日。

「何やってるんだよ！」

怒りに満ち溢れた目をしながら母は私のところへ来た。

バシン。

体制が崩れる。心臓が異常な程早い。私は何もしてない。していない？見ていたのがいけなかったの？

何がんだかわからない。でもきつと、何か気に触るようなことを、私はしたんだ。

「…ごめんなさい。」

震える声でつぶやいた。叩かれたのが痛いのかなんだかわからないけど、涙がでてる。

私は悪い子だ。母の思っているように動けない。頑張るから頑張るから、いい子でいるから、もう喧嘩しないで。

必死に心の中で思う。

また叩かれるのを恐れて声が出ない。

母はふてくされた様な感じで、妹をつれて布団へ入った。

妹だけ可愛いんだ。私じゃないんだ。

妹が母に連れられた時に、そう思った。

怒りというか、憎しみというか、色んな気持ちがこみ上げて。でも母とは離れたくないという強い思い。

妹が連れられてたった一人になったように気持ちになって、ソファ―で座っている父の隣へ行った。

「お父さん…どうしよう…」

涙があふれる中つぶやいた。

「とりあえずお母さんに謝ってきなさい。」

父からの思ってもいない言葉だった。
そんなにも、そんなにも、私が悪いのか。何回謝れば今日が終わるのか。

でも足は母と妹のいる布団へと動く。

「ごめん…なさい…」

母は何も言わない。そして1ミリとも動かない。

頭がだんだん真っ白になっていく。

母が目の前にいるのに、どんどんどんどん遠くなっていく感覚。

今、母は寝ているわけがない。

子供の私でもわかる。

私を全否定された瞬間だった。

それと同時に目に見えているのに何も言わない父ともどんどん遠くなっていくような気がした。

お父さん、これを私にやらせたかったの？

ただただ、呆然と立ちすくんだ。

どうすればいいのかわからなかった。

妹が母の隣で安らかな顔で眠っていた。

小さな大人（前書き）

自分が周りと違う。自分が大人だと思い込んでいた

小さな大人

あの無視された日から、何があったのかあまりよく覚えいない。いつの間にか時間が過ぎて、太陽が昇って沈んで一日一日が過ぎていった。

そして私は年長組になって妹が幼稚園へ入ってきた。

私は妹に依存していた。

だからよく、年少組の妹のクラスに行っていた。

妹はおねえちゃんおねえちゃん、って懐いていた。

私がしっかりしなきゃ。妹を守らなきゃ。そんなことばかり。

実際、妹は私がいなくても十分生きていける状態だった。

別に母に嫌われてもいないし。

懐いてくる妹が大好きで、一つの光で、でも大嫌いな存在でもあった。

母親に良い顔して、可愛がられようとしているのが私には見え見えで、内心イラついてしょうがなかった。

ちょっとした事ですぐ泣く。

抱っこしてあやして。

でもそれが妹の計算で、それがム力ついた。

妹ばかりかわいがって。

私にはそれができない。頭が悪すぎて計算なんかできない。

でも妹にはできたんだ。

たぶん私の姿を見てるからだと思うけど。

イラついてしょうがなくて、母の前で妹を一番上の階段から背中を押し突き落としたり

妹を仰向けにした後、お腹の上を足で踏んづけたり。

そんな子供になった。

母は私を怒鳴りつけ妹をかばった。妹はわんわん泣いていた。

たくさん泣けばいい。たくさん泣けばいい。泣いて泣いてお母さんにしがみついたらいい。

私はいなくなればいい子だから。

私は幼いながら歪んでいった。

妹のクラスから自分のクラスへと戻る。

「由利は私の！」

「違うよ！私のだよ！」

戻るとそんな私の取り合いが女の子の友達同士でなぜかよくあった。

正直どっちでもいい。

ただみんなで仲良くすれば？

「皆で仲良くしようよ」

そんな事言っても

「やだ！由利ちゃんと二人で遊びたい！」

二人ともクラスで一人にいる子だけだ。

私にはどうでもよかった。

ただ気に入られたけど面倒だなんて。

もっと普通の子と仲良くしたい。

自分のクラスにいるのが疲れる。自分で自分の首絞めてるようなものだけだ。

弟の誕生（前書き）

家族の運命を変えた

弟の誕生

「3人目なんか生みたくない！こんなに育てられないよ！旦那も帰ってこない状態なのに…」

いつだかの夜、泣きながらわーわー誰かに母は電話していた。電話切った後も、しくしくとソファ―に一人座って泣いていた。

「…どうしたの？」

すぐにつけよって顔色を伺いながら話した。

「いいから…」

弱弱しい声で母は言って、ずっと静かに泣いていた。

何か悪いことしただろうか？また何かやっただろうか？

私は自分のことばかり考えていた。

父が帰ってきてても何も言わず、母は泣いて布団に入っても泣いていた。

父は何も話さず、眠ってしまった。

次の日の朝には何も変わらない母がいて、そして何も変わらない日々が過ぎていった。

が、母のお腹が日々大きくなっていった。

ある日の幼稚園から帰って家に入ったとき

「お母さん、今お腹の中に赤ちゃんがいるんだよ」

「赤ちゃん！？赤ちゃんがいるの！？」

突然の報告に驚くしかなかった。

お腹を撫でてみる。不思議で不思議でたまらなかった。

この中に赤ちゃんがいるなんて…

「由利も里香（妹）もこうやって生まれてきたんだよ」

母のその顔は穏やかだった。相変わらず父は帰ってこないが…。

母のお腹が本当に本当に大きくなった頃、突然遠くに住むいとこの所に行くことになった。

いとことは私より二つ年下のたけと、私より二つ年上のなつがいる。そしておじいちゃん。おばさん。おじさん。

あまりも家が遠すぎるから、年に1度会えるか、会えないか。たけとなつとは昔からとても中が良いから凄く嬉しかった。

車の中では妹とはしゃいでいた。

家族みんながいる。それだけで嬉しい。

しりとりやら、簡単なゲームを妹と母として賑やかだった。

父は何も言わず、運転をしている。

片道5時間。でもあつという間についた。

急いでいとことの家のチャイムを押すと、おばさんとなつがでてきた。私の後をちょこちょこ妹がついてくる。

「おー。よく来たねー。由利大きくなったねー。里香もー。」
といつても変わらないおばさんと

「わー！由利ちゃん久しぶりー！里香ちゃんも大きくなったねー！」
おばさんと同じようなことを言うなつ

「なっちゃん！久しぶり！」
はしゃぐ私。

「なっちゃん！たけー！」
たけと妹は同じ年だ。なんとなく気が合うのは、私となつ。たけと妹。そんなコンビ。

そしてゆつくりと父と母が来た。

もういとこの家に着いたのは夜で、おじさんが仕事から帰ってきた後パーティーをやってくれた。

色んなものをおばさんはテーブルに並べてくれた。

「わー！すごい！ご馳走だ！」

そう言つて子供ら4人ではしゃいでいた。なぜかその時に撮つたであろうビデオに、4人でパーマンのポーズをして踊っていた映像が未だにある。母のお腹はすごく大きくなっている。

おじさんは

「おー、由利大きくなったなー。里香も大きくなって。どら。」
そう言つて私と妹を抱っこしてくれた。

「おー！重くなつたなー！赤ん坊だったのに成長は早いなー！」
すごく優しいおじさん。5年後には別人のようになるのだが。

「子供の成長は早いですねー。」

笑顔でそう言つてビールを一口父は飲んだ。

影からそつとおじいちゃんが来た。

「おじいちゃんもおいでよ！」

はしゃいでそう言ったが

「いやいいよ…」

冷蔵庫からビンの焼酎を持って自分の部屋に入っていつてしまった。あまり気にもとめず、相変わらずいとはしゃいでいた。

どこかの他人の爺さんがいとはしゃいで一緒に住んでるんだ。いとはしゃいで変だなあ。

なんてそんなことを高一になるまで思っていた。

まさか母の父親だなんて。自分のおじいちゃんだなんて。私が孫だったなんて。

知る由もなく。

そしていとはしゃいでこの家に泊まって数日後ぐらいの夜に、母と父は突然姿を消した。

「うわーん！わー！お母さんがいないー！ー！」

大泣きしている妹の声で起きた。確かにいない。

「大丈夫か！」

突然おじさんがドアを開けたのでびっくりした。

「お母さんがいないー！」

泣き止む様子がない妹。

「どら。大丈夫だ。おじさんとミカン食べてお母さんとお父さん待つてよう。由利もおいで。」

「わー！」

妹はわんわん泣きながらおじさんに抱っこされて居間へ行った。私もついていった。

「ほらミカンだぞ。お母さんは今、病院で赤ちゃんを産んでいるんだぞ。」

そう言つて妹を抱つこしながらミカンをむいていた。妹はミカンを食べると泣き止んでいた。

食べ物があつたら泣かないのか。
冷静にそう思つてしまった。

私は妹とは離れて一人で座つていた。
妹が泣き止んだらものすごく家が静かになった。

たった一人になったみたい。なぜかわからないが不安でしょうがない。

自分の周りが真つ暗になったように思える。

口を手で押さえて、声を殺してなぜか泣いた。おじさんにも妹にも
ばれないように。胸が痛い。

本当は誰かに支えられたかった。

暗闇に一人ぽつんとした。

数分して、妹がミカンを2個程食べ終えておじさんの腕の中で眠つていた。

深夜だったのもあつておじさんとたけとなつと一緒に寝ることになった。

「おはよー！」

なつの大きな声で起きた。もう朝がやってきた。たけはまだ寝ていたが。

「うわーん！お母さんがいないー！」

妹が起きてまた泣き出した。

「お母さんは病院なんだよ。」

「うわーん！わー！」

私の声は意味がなかった。なつはどうしようというような顔をしている。

「どら、どら、朝ごはんもミカンもあるから食べよう。おいで」

たけはこんな状況でもまだ眠っている。妹はおじさんに抱っこされてミカンを食べたらまた泣き止んだ。

妹はミカンが大好きなようだ。

3人でご飯を食べていると、ようやくたけが起きてきた。

「昼になったら病院へ行こう。赤ちゃんが生まれたんだ。」

「本当に！？生まれたの！？」

5歳の私には何起こっているのかわかっていた。妹はわかっている様子だったが。

みなでお昼ご飯を食べた後、病院へ行った。

おじさんの後をみんなで行っていく。

そして一つのドアから看護師が赤ちゃんを抱っこして私達の前へやってきた。

「男の子ですよ」

「由利、お姉ちゃんなんだ。抱っこしなさい。」

おじさんに言われて、看護師に少し支えてもらいながら、赤ちゃんを抱いた。

重い。小さいけど、すごく重い。これが私の弟なんだ。

すぐに看護師が弟を抱っこして、ドアの向こうへと消えたがまだ私の腕の中には弟がいる重さが残っていた。

一瞬の出来事だったが、尊いものだ実感した。

数日後、母が退院して弟をいこと妹と4人でぐるぐる手を回りながら抱っこした。

家族もいともみんな喜んでいた。

オムツを換える時も赤ちゃん用でお風呂に入れるときも、みんな喜んでいた。

名前は「賢」^{けん}賢く育つようにと由来のもと両親がつけた。

そして数日後、いことと別れ5人の家族で元いた家へ戻った。

小学1年生

弟が生まれた事によって、母は誰よりも弟を愛するようになった。

「男の子はやっぱり女の子より可愛いわ。」

それが母の口癖になった。

母の気持ちもわからない訳ではなくて、妹も私も弟を可愛がった。そして父と顔を合わせない日々が始まった。

が、ある日、何気ない日に、母と3人兄弟で病院へ行った。

弟は腸重積にかかっていた。

母は慌てていたが、しばらくの間、母と弟で入院し、妹と私は父と暮らす様になった。

3人だけの生活。母のいない生活で普通なら不安になったりするだろうはずが、変な安心感が私の中に漂っていた。

朝起きたら父がご飯を作って幼稚園のバスが来るまで見送ってくれる。

幼稚園から帰って来たら妹と一緒に友達の家で遊ぶ。

その友人宅に夜仕事が終わったら父が迎えに来る。

その後はカップラーメンを食べながら夜遅くまでわいわいゲームをやる。

そして寝る。

その繰り返し。

父は妹、私に向かって怒ることも叩くこともなく、優しくった。たまに3人でお見舞いへ行った。

「もう大変だよー。」

母はそう言っていたが、顔は笑顔だった。その横にくつつく様に寝転がっている弟。

とても苦しそうに見えなくてニコニコしていた。

なぜかわからないけれど、心が満たされていく様な気がした。その弟が入院している頃、

私は小学一年生になった。

入学式に来れなかった私に、色々なお母さん達が寄ってきて

「どこの幼稚園からきたの？」

と質問責めになった。

一つ一つ答える事に、「しっかりしてるねー。」

とか

「あの幼稚園からきたの。すごいねー。」

など言われていた。何が凄いのかわからなくて、どう対応したらいいのかわからなくて

「あはは」

と笑ってごまかした。

小学校ではすぐに友達ができた。

優しくて頭のいい子。そして真面目。そんな子と一緒にいる事が多くなった。

幸いにもいじめられることなく、私はクラスに溶け込んでいった。

家族も弟と母が戻ってきて、またほぼ4人での暮らし。

弟がいることによって母は不安定でもなくなった。全てはもう順調だった。

もう大丈夫だ。

この生活が続くんだ。

そう思っていた。

ある日、母にテストを見られた。別に隠してもいなかったが。

「なんでこんな大事なものの…見せなかったのよ！なによこの点数。今までのテスト全部みせな！」

私に興味がないから、テストなんて関係ないと思っていた。

一度も

「プリントみせて」

「テストある？」

とか聞かれなかったから全部自分の責任だと思って、いくら点数低くても関係あるのは自分だけだと思っていた。

「なに…これ…」

国語30点。算数20点、計6枚程出てきたテストの点数はそんな数字が並んだ。

バチン。

久しぶりに叩かれたから、ボーっとしていて舌を嚙んでしまった。

「なんで早く言わないの！今から勉強するよ。まずこれのどこがわからないのよ？」

舌から血が出ていて、痛いなあ。という気持ちとなんでこんな怒っているんだろう。

私なのに。と冷静に思っていた。

母の指差した一番最初に受けただろう、算数のテスト。

「何が、わからないの？」

低い、どすの効いた声。
威圧感。

「なにがわからないか、わからない。」

バチン。

正直に答えたつもりだった。

「これとこれが一緒になると何個になる？」
財布から10円玉をだして聞いてきた。

「…2個。」

心臓が早くなっていく。

「そう。じゃあこの問題やってみて。」

チラシの裏に書かれた簡単な問題。でも私にはわからなくて、適当に書いた。

バシン。

「なんでつわからないのよ！？こんな問題わからなくてどうするの？1たす1は2になるの。わかる？」

「うん…」

怒りまくっている母に、なんでこんなにも怒っているのかわからない。まずそこからわからないよ。お母さん。

心の中で話した。

「ほら、この問題やってみな。」

また手作りの問題。わからない。

バシン。

「なんでっ」

この繰り返しで30分ぐらい続いた。結局1たす1は2になる。という事だけ覚えた。なぜ2になるのかわからないまま。

「本当に物覚えの悪い子だね。しばらく一人で勉強してな。」

冷たく言われて、私は一人机に向かった。

「わからなかったら教科書読みな。それで理解しな。」

真面目に授業は受けている。ノートにだって一つこぼさず黒板を写している。

ただ問題だけはわからなかった。

夜ご飯を食べる以外、全ての時間勉強に捧げた。

学校へ行くと毎日『居残り』をされた。母はこの時間、友達と遊んでいると思っていたみたいだが。

放課後居残りのメンバーはいつもコロコロ変わるが、私はほぼ毎日、あまりにも学校に居続けるから、当番でもない掃除を手伝っていた。

「ありがとう。」

「由利ちゃんがいると掃除が早く終わるよー。」

等、クラスから言われていた。

「いいんだー。なんとなくしちゃうんだよねー。」

と笑顔で言った。

本当はみんないつも居残りする私をバカにしているんだ。と同情しているんだ。と思っていた。頭の悪い私を笑っているんだ。となぜかそう思っていた。

毎日居残り。家に帰れば母との勉強。夜ご飯以外、勉強。

ある日のテストで、点数順に名前が教室に張り出された。私の友人達は上のほうだった。私はというと、一番下だった。

クラスの中で一番下の人。バカすぎていじめられるのではないかと

思ったけど、皆何も気にしていないようだった。

休み時間になるといつもと変わらず友人達は来てくれて、何も変わらなず接してくれた。

そんな日々が続く頃、参観日がやってきた。

クラスに張り出された順位はそのまま。
弟を抱っこして母は来た。

その日に母は狂った。

家に着くなり、私を叩き出した。

「痛い。なにっ。」

「なんでっなんでこんなに勉強教えてあげてるのに一番下なんだよ。なんでそんなにバカなのよ。勉強だってわかったふりするんじゃないよ！」

なんかよく解らない事を叫びながら叩いてくる。
顔はもうマヒしているのか、痛みを感じなかった。ただただ叩かれる。

私を叩くのに飽きたのか、次は食器を次から次へと割り出した。

「ちくしょー。」

なんか叫んでる。恐怖で手が震えた。それでも今やるべきことは勉強だと思い、机へ向かった。

後ろからは激しく食器の割れる音と、母の奇声で頭が痛くなった。

鉛筆を握る手も震える。

声を殺して泣いた。泣きながら教科書を読んだ。涙でページが柔らかくなった。

どうしてわからないんだろう。

自分で自分に聴いてみた。

頭が悪いからだ。勉強以外でもどんくさいだろ。いつもお母さんが言っているだろ。何も出来ないんだよ。お前は。

そっか。

自分の中自分は、そう答えた。

なぜかわからないけど、その間は幽体離脱をしている感覚で、ボーっと奇声を発している母と、机に向かっている私を第三者のように、少し遠い所で私は見ていた。

もう一人の私（前書き）

私の中のワタシ

もう一人の私

なぜ私は生きているの？

産まれたから。

何のために産まれてきたの？

お母さんの為だ。

その人の為？それなら消えた方がいいんじゃないの？
その人はそれを望んでいるんじゃないの？

消えたほうがいいかもしれないね。でも見てみな。
教科書にも載っているように、世界中に苦しんでいる人がいっぱい
いる。

うん。

幼稚園でも皆に相手にしてもらえない子がいた。

うん。

お前はその子達の為にいるんだ。産まれて来たからには、人の為になつてから死にな。

うん。わかった。

私の中のもう一人の私が話してきた。奇声を発している母が、疲れたのかぐつたりとソファーに横になっている。

目の前には文字が滲んでいる国語の教科書が広げられている。黒人の人が苦しんでいる写真が写っていた。

世界で苦しんでいる人を助けよう。いじめられている人の助けになろう。そう決意した。

新しい家（前書き）

新しい学校

新しい家

遠く離れた新しい家へ着いた時、従兄弟が出迎えてくれた。

「わー！！久しぶり！！」

従兄弟は私より2つ歳上の姉、なつと2つ離れた弟だけの二人。

なつと抱き合った。

遠すぎて会うことは1年に1回あるかないかだからだ。

だからものすごく久しぶりだった。

新しい家は事前に従兄弟が決めてくれていた家。

従兄弟の家から徒歩10分程度の所だった。

新しい感じ、新しい匂い

何もかもが新鮮だった。

この家の前の持ち主が誰だと知らずに。

とりあえず、家の中はダンボールが置かれ、もう夜だったから従兄弟とパーティが始まった。

「かんぱーい！！」

この時程楽しいときは、後にも先にもなかった。
わくわくどきどきが止まらない。

久しぶりに従兄弟と遊びまくる。
大人たちはお酒を飲んでる。

なんだかわーわーみんなでやっていて、いつの間にか眠ってしまった。

次の朝からは、父は従兄弟の父と一緒に仕事をやるようになった。

この地に来た理由は、従兄弟の父と仕事をするためだったらしい。

母は猛烈に反対したらしいけど

私は新しい学校へ行くために母と従兄弟が通っている学校へ挨拶へ行った。

徒歩片道40分。

引越しする前は徒歩5分で着いた。

遠すぎる。果てしない道をただただ母と歩いた。
田舎の緑しかないこの果てしない道を

「学校になじむといいね」

「遠いね」

母はそんな話を話していた。

何を話したらしいのかわからなかったから、相槌を打つしかなかった。

この果てしなさは、永遠なんじゃないかとも思った。

果てしない道の中の緑に包まれた学校。

ようやくついた。

校長先生に挨拶。
そして担任に挨拶。

どうやら、私は2年2組になるらしい。

ここが私が通うところ。

なんだか展開が速すぎて、現実と感じなかった。

帰るときも母と一緒に果てしなく歩いた。

今度はなんだか和やかで会話もできて、母と子。

まさにこと言葉が似合う見た目だった。

もうすべてが新しい。

今までの母はもういなくなったんだ。

そう感じた。

妹は保育所へ行くことへなった。

母（前書き）

家の中

母

「うわわわああっつ！！」

母が泣きながら悲鳴を上げて帰ってきた。
私が4年生の頃だった。

何があっただ。

「・・・どうしたの？」

恐る恐る静かに聞いた。

「ほっといつて！！」

私を睨み付けた母はそう言い放った。

学校では私は友達はいたけど、転校してから毎日といっていいほど
陰口、ノートには『馬鹿、死ね』という文字。
靴、筆箱もなくなることもあった。

トイレではトイレの掃除で使うほうきで叩かれ、
教室の掃除をするときはチョークの砂を頭からかけられたり
もつぷで頭から誇りをかぶせられたり

そんなのが日常茶飯事。

妹だけが救いだった。

「おねえちゃん。死にたい」

元気で明るい妹そう言った。

「何言ってるんだよ。おねえちゃんがいるから大丈夫だ」

そう言って、妹が友達の家に行った後
カッターを握っていた。

無意識で手首が近くにあったから切ってみた。

ぼーっとしてた。

『おねえちゃん。死にたい』

そんな言葉が頭の中で連呼する。

『うわわああああ』

母の悲鳴が頭の中に響く。

手首からは血が流れてた。

なんでこんなことしたのかわからないけど、
ぼーっとみてた。

流れてる。

全て流れればいいのに。

ぼーっとそんな事を思っていた。

夜6時父が帰ってきた。

母は泣きながら家を出て行った。
父は何も言わなかった。

妹は違う部屋にいてわからなかったと思うけど。

「死にたい。由利。」

ビールを一口飲み、父は言った。

なぜみんな私に言うのか。

「死ねば？」

思わず言った。

「そうだな。」

苦笑いで父は言った。

『死にたい』

『死にたい』

『死にたい』

頭が痛い。

また手首を切ってみた。

みんなの言う、『死にたい』が流れていくようなきがした。

お風呂に入る。

ザブンと波が大きくうねった。

『うわあああああつつつ』

死にたい。死にたい。死にたい。

お湯の中で叫んだ。

私はどうしたらいい？

殺せばいいの？

私今生きてるの？死んでるの？

それさえもわからない。

手首が少しじんじんする。

このままお湯の中にいれば死ぬる。

だまって、もぐってみた。

苦しくてすぐ頭を出してしまった。

声を殺して泣いた。

苦しいよ。消えたい

私には死ぬ勇気が無い。

誰か助けて。

心の中でつぶやいた。

依存（前書き）

友達に依存していた私

依存

小学校5年生になった頃、ずっと同じクラスだった私の家から一番近い

女友達と一緒に学校に行くことになった。

最初は1日とか2日だけ。

でもいつしか毎日、一緒に行くようになった。

家での事、学校ではいじめられている私にとっては
唯一の救いの人物だった。

暗い毎日を過ごす中、話題は暗い話しか出てこない。

そんな友達も嫌になったのか、一緒に居ても何も話さなくなった。

『誰でもいい。話がしたい。願わくば、助けて』

そんな願いをただ一人祈った。

お母さん、あなたが情緒不安定なのはわかった。
でも私は何のために生まれてきたのでしょうか？

お父さん、なんであなたは母の力になれないのでしょうか？

誰か助けて

息が苦しい

また腕に残る一本の細い傷跡。

「おい！そこでなにやってんだよ！」

「え？いや、掃除してただけだけど…」

「邪魔なんだよ！どけな！」

掃除をしているだけで、クラスの人からはこう言われる。

「由利ってさあ、なんかキモイよね」

聞こえてるよ。

コソコソ言われる女子の声。

「あはは！お前はこれが似合ってるんだって！」

突然、教室で使う埃だらけのモップを頭の上からバサバサされて

服も頭も埃だらけ。

喘息を持っている私は咳が止まらなくなる。

でも馬鹿を相手にしたら、自分も同じレベル。

馬鹿になることになる。

ひたすら無視。

じっと我慢をして、心だけは締め付けられて。

気づいたら記憶が飛んでいることがわかった。
記憶が無い。特に家での記憶

ただ繰り返し、家に誰もいない。いたら母が情緒不安定になる。
叩かれる。

父はいない。妹は私しかいない。弟は母親に可愛がられている。

それしか記憶に無い。

というか、記憶を自分で消している。

そしてなんだ？この感覚

自分がわからない。だれでもいい話がしたい。

この虚しさ。

自分で傷つけることで安心する、消えない罪悪感。

私はそれでしか自分をわかる手段がないことがわかった。

狂い（前書き）

段々と自分が狂いだした感覚がした

狂い

学校、一緒に通っている友達。
なんとなく話を聞いていて思った。

自分の家が普通だと思っていた。
けれどなんか違う。

安定した基盤。幸せそうな形。いつも家族と話しているような雰囲気。
気。

自分は違う。違う世界にいるみたい。

友達と話して同じ空間にいるのに、一人違うような感じ。

妹を連れて家へ帰る。

鞆から鍵をだす。

しーんとしている、掃除もあまりしていない少しぐちゃぐちゃな家
の中。

何か私の心の中のようなようだった。

『何かあれば死ねばいい。それまでまだ頑張ろう。妹も、弟もいるんだから
お母さんだって、私をきつと必要としている。いらない子でも、あたるものがないから私なだけ』

強くそう思った。

妹に近づいていった。

「ねえ…前にいた家に、戻らない？お金ならおねえちゃんもってるから」

実際、給食費も自分で払っている私には計画的に貯めているお年玉がまだ結構残っていた。

「うーん、やだよ。お母さんと一緒にいたいもん」

「でもいつもいないよ？」

「でも待ってるもん」

「…」

妹と私は似ているようで似ていない。

妹は殴られない。殴られてもいない。

いつだか母親がなぜだかわんわん泣いて寝室行ったことがあった。

それを起こしに行ったのは、妹だった。

へらへら笑って。踊って。

まるでピエロのよう。

それに続いて、私も弟も一緒に行った。

でも一番必死だったのは、妹だった。

いつでも母を信じていたのは妹だった。

私はまだわからない。信じてはいけない。でも信じたい。自分の母
親なんだから。

妹は一人で人形で遊び始めた。

私は勉強をした。こうやって勉強しても頭に入らない。

だからいつまでたっても馬鹿。

でもこうするしか今は方法はない。

幼い私はそう思った。妹の闇にきずかないふりをして。

午後6時頃、母が帰ってくる。

家の前に車が通るといちいち妹が

「お母さんが帰ってきた！…あつ違った…」

何回も言っている。でもその言葉を聴くたび、机に向かいながら私も一緒になってわくわくしたりがっかりしたりしていた。

「あつ！帰ってきた！！」

その言葉に私も嬉しくなっていた。

でも帰ってくる母は、ぐったりと疲れていて

「なんで掃除してないの！なんで米といてって言ったのにしてないの！ああもう、ご飯ないわ」

怒鳴って怒っている姿が多かった。

そんなご飯がないときは、冷凍のご飯をチンして食べて急いで焼いて作っただろ肉と野菜を食べて急いでご飯を食べた。

「さっさと食べな！片付かないでしょ！」

「…いいよ。私が片付けるから」

「あつそう？これから行くところあるからよろしく」

急いでバタバタまた出かける準備をしている。

「どこ行くの？」

妹がイライラしながら準備している母に聞いた。

「あんたに話してる暇なんてないんだわ！」

そう言っただけで強くドアを閉めた。

ドアの音がやけに響いて、なぜか胸が締め付けられるように痛かった。

母と一緒に帰ってきた弟は無邪気にご飯を食べていた。

私はどうすればいいのだろう。

一人暗闇に佇んだ。

母はどうしたら目を向けてくれるんだろう。

そう思った

私の寂しさ。孤独さ。両親を憎む黒い気持ち。学校での様々なイジメ。空虚感。

そのどうしようもない憎悪包まれた気持ちの矛先は、愛情を深く注がれているように見える弟になることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2585o/>

深い海の底。光という幻想を見た後で

2011年4月14日11時55分発行